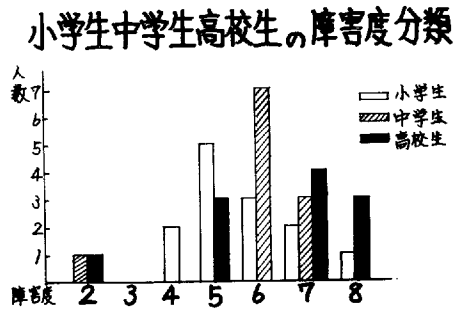
筋ジス病棟における中学生患児との接し方

国立療養所東埼玉病院
工藤やい　諫山和代
千葉幹子　甲斐里美

〔はじめに〕

S52年10月現在、当病棟のＰＭＤ児35名中、小学生13名、中学生11名、高校生11名である。特に中学生児との言葉使い、等のトラブルが多く夜間の出来事として、朝の報告にコミニユケーションのうまくいかない事が毎日の様に話題となった。閉鎖された病院という社会の中にいる児により良いコミニユケーションを持って行く為にはどのような対話が良いか、カンフアレンスを重ねながら現在まで来た。障害度分類は写真のとおりです。

写真１



一般に中学生というと健康な生徒でも親子の断絶とかいわれ、大人への反抗心等、色々問題が生じ易い年令であるのに、家族とも離れ病院という社会の中で、一人で立向かって行かなければならない、孤独な思春期の子供達には自己を守るすべとして体力の衰える現在、ただ言葉のみでの反抗を余儀なくされ、思うように話せない状態です。

カンフアレンスの中から

ＰＭＤ児は新しい人に慣れるのに時間がかかる。中学生は特に言葉数が少なく、はっきり物言を云わない為に、新しく来た勤務者はどうしたら良いかとまどう。患児はイライラしその為に罵声がとぶ、自分だけが注意を受けると腹を立て、なんでも皆んなと同じでなければならない。機能低下を防ぐ為、更衣、車椅子移動、その他の日常動作など患児の出来るところは、自分で行なわせ、出来ない所を介助するが、看護側の姿勢に対して、少しでも思うように行かないと反発となって返って来る。中学生児の気まぐれな言動に振りまわされないように、心して勤務についているものの胸に刺さる様な言葉がかえって来ると情けなくなる。そして特に次の様な問題点が上げられた。

問　題　点

1. 言葉使いが悪い。

特に新しく勤務交代となった看護婦に対して多く見られた。

2. 意志表示がはっきりしない。

3. 自己中心的である。

対　　策

1. 看護婦と指導部との話し合いを行ない、なるべく患児の意志にそい、交友関係をもつ為にと10月に入り、部屋変えを行なった。

2. 指導部の個人的な指導と卓球、野球、その他のゲームでストレス解消を試みた。

3. 中学生児への接し方を統一した。

写真2

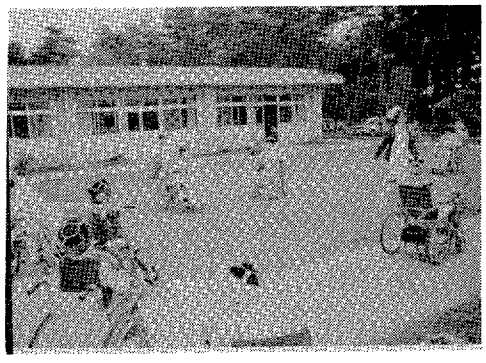


写真3

〔結　　果〕

今までは中学生児だけの部屋だったが高校生と一緒の部屋に交えて、起床時更衣に時間がかかる為、同じ部屋の自分でできる高校生も一緒に起こす様にした。問題のある患児にナース側も遠慮せず、はっきり言ったり、態度でしめしたりする事によって、患児からも話す様になって来た。日曜日など進んで日常生活に必要な物の準備など手伝う様になった。

〔おわりに〕

問題として取り上げた事で勤務者の患児への接する姿勢も変って来た事は確かな事でもある。中学生児の一年間の成長と私達の経験を今後の看護に生かして行きたいと思う。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

〔はじめに〕

S52 年 10 月現在、当病棟の PMD 児 35 名中、小学生 13 名、中学生 11 名、高校生 11 名である。特に中学生児との言葉使い、等のトラブルが多く夜間の出来事として、朝の報告にコミニユケーシヨンのうまくいかない事が毎日の様に話題となった。閉鎖された病院という社会の中にいる児により良いコミニユケーシヨンを持って行く為にはどのような対話が良いか、カンフアレンスを重ねながら現在まで来た。障害度分類は写真のとおりです。